



お嬢様とお見合いして  
おねだり孕ませ<sup>な</sup>件

ONEDARI  
HARAMASE

小説 筆祭競介 挿絵 わつきるみ

立ち読み版

序章	生徒会は、お嬢様で回ってる	006
第一章	憧れのお嬢様たちと連続お見合い	018
第二章	おっとり大和撫子と初中出し	052
第三章	ゴージャスお嬢様と膣内射精	101
第四章	幼馴染みと危険日セックス	145
第五章	孕ませロシアンルーレット	187
終章	ヤレばデキる	251

## 登場人物紹介

Characters



### すずかぜりん 寿々風凛

いつも元気なボクっ娘お嬢様。駒影学園では生徒会の書記を務めている。晶とは幼馴染みで、小さい頃に結婚の約束をしたことも。



### るりみやひめの 瑠璃宮姫乃

駒影学園で生徒会副会長を務めるお嬢様。厳しい性格で周りから怖れられたりもしているが、好きな相手には引っ込み思案などところがある。

### あまがせ 天ヶ瀬さやか

駒影学園の生徒会長。おっとりとした物腰で、生徒会のまとめ役である。華道を習っており、大和撫子を体現したようなお嬢様。



おうぎあきら

### 王城晶

三人のお嬢様とお見合いをするようになった男の子。三人とは同じ学校の生徒会でいっしょ。

※

トリプルお見合いが発覚してしまった翌日の水曜日。

生徒会が休みだというのに、晶は生徒会室にいた。

お昼休みに書記の後輩が自分のクラスにやってきて『放課後に話があるから一人つきりでくるように』との、生徒会長からの伝言を受けていたからだ。

「……はあ」

さやかに呼び出しを食らったわけがはっきりとわかっているのに、思わずため息が漏れてしまう。

（……怒られるんだろうなあ。やっぱり……）

無論、理由は週末デートの一件だ。

今になって思えば約束の当事者である自分が、ちゃんと彼女の言い分をフォローするべきだったと考える。

が、何しろあの時はお嬢様たち三人の様子が尋常ではなく、自分も精神的にいっぱいいっぱいだった。

（……なんて言い訳……会長には関係ないもんなあ……）

あんな形で約束を反故ほごにされたのだから、彼女が怒っていて当然だ。

さやかが自分とのデートを決めた時に、物凄く喜んでいたことは、もちろんはつきりと

覚えている。

「……晶さん」

「おわああ!!」

そのさやかのことを思い出していたら、いきなり本人に後ろから声をかけられて、晶は座っていたイスから飛び上がった。いた。

「か、会長!? い、いつの間に……」

「……………」

こちらの問いかけに対しても、黒髪のお嬢様は何も言ってこない。

(つて……あ、あれ? なんか……思ってたのと……ちよつと違う?)

てつきり怒っていると思っていたのだが、そんな雰囲気ではない。

彼女は妙に思い詰めた顔をして、ジッとこちらに視線を向けている。

しかし、相手の態度がどうであれ、今自分がしなくてはならないことは決まっていた。

「……ごめん。そ、その……せつかく会長からデートに誘ってくれたのに……あんなこと

になつちやつて……つて、おわああああ!!」

神妙な顔をして謝っていたら、いきなり相手がこちらの胸に飛び込んできた。

「な、ちよ、え? ど、どうしたの?」

状況が理解できずに、少年はひたすら焦りまくる。

しかもこんな時だというのに、鼻先で揺れる黒髪の優しい香りが鼻孔をくすぐり、頬を軽く赤らめさせた。

「……ここが。昨日からずっとモヤモヤしてるんです」

さやかが晶を下から見上げるようにして、自らの豊かな胸を片手でソツと押さえる。

「……え、えと。ごめん。あんな約束の破られ方したら、さすがに会長でもモヤモヤするよね」

「そういう意味ではありません。……こんな気持ちになるの初めてなんですけど……わ、私………凛さんにヤキモチを焼いているんです」

「は？ ヤキモチ？ え？ で、でも………なんで？」

それは惚れた男が他の異性と親しくなる際に湧き上がる感情のはず。

さやかは別に自分に惚れてるわけではないのだから——少年には本当に意味がよくわからなかった。

「ううう……ッ。……ヤ、ヤキモチを焼く理由なんて一つしかないじゃないですか！」

キョトンとしている晶に対し、彼女はたまりかねたようにいきなり叫ぶ。

そして真一文字に閉じた唇を波立たせ、ちよつぱり涙目になりながら、その清楚な美貌を真っ赤に染めて睨んでくる。

(か、可愛い♡)

こんな時だというのにそんなさやかかの姿にポーッと見惚れてしまい、晶は相手の言葉をバカみたいにそのままなぞっていた。

「ヤキモチを焼く理由なんて、そりゃあ確かに一つしかないけど——って……えっ？」  
顎が落ちるように、ポカンと口が開く。

まさか本当に、本気でさやか自分が自分に惚れているとでもいうのだろうか？  
怒った顔まで思わず見惚れてしまうような、こんな美少女が？

性格も立ち居振る舞いも極上で、おまけに実家が日本屈指の名家であるお嬢様が——至つてフツメンな自分なんかには？

(……で、でもこれ……)

話の流れも相手のリアクションも、そうとしか認識できない。

今まで同様、自分のカン違いだと考えようとするのだが、これだけ必死な姿を目の前にして、それを打ち消せる理由が何も思い浮かばなかった。

「あ、晶さん！ わ、私もう！」

「おわあ!! ちよっ、うわわわわわっ!!」

しかも彼女は『ここまで言つてわからないなら、あとはもう行動あるのみ!』と言わんばかりの強引さで、再び晶に抱きついてきた。

不意を突かれた少年は、意識がフワフワしていたこともあり、あっさりとバランスを崩

して床の上に押し倒されてしまう。

「……か、会長……」

顔を真っ赤にしたまま、自分の上になっているさやかを啞然と見上げた。

（お、俺、今……女の子にマジで迫られてるんだよな!）

そう思うと胸が早鐘のようにドキドキと打ち、口の中がカラカラになってくる。

「こ、これが……私の気持ちです!」

しかも、彼女の美貌が急にこちらに接近してきて——むちゅうう!

己の唇が柔らかくて瑞々しい感触に覆われる。

（は？ キ、キキキキキキス!? 俺、ファーストキスしちゃってるううう!

って……え？ マジなの？ 本当に会長が俺なんかのことを!）

さすがにここまでされて、相手の気持ちを誤解するほど晶も鈍くはない。

思春期になって以降、初めて自分に対する異性の好意を確信できた瞬間だった。

「ツツツツツツ!!」

心の底から感動し、晶は限界まで目を丸く見開いたまま完全に固まってしまった。

男として、女の子に本気で『好き』だと伝えられることが、これほど嬉しいとは思わなかった。

そのまま一体どれだけジッと唇を重ねあわせていただろうか。

一瞬にも、数分にも思える時間が流れた後――。

「……つぶふあ」

唇をゆつくりと離れたさやかが、こちらの気持ちを探るようなオズオズとした表情で上から見詰めてくる。

ファーストキスと初告白の感動で、意識が遠くに吹き飛んでいた少年も、やっとここで我に返った。

「……え、えつと……」

喉から飛び出しそうなほど心臓をドキドキさせながら、改めてさやかを見上げる。

「好きです」

とうとう言葉でも、はっきりとそう伝えられた。しかも――。

「晶さんのこと、他の誰にも取られたくありません。姫乃さんにも、凛さんにも……」

「か、会長……」

「だ、だから私に………晶さんの子供を孕ませてください」

「なっ!？」

あまりに突拍子もないそのセリフに、晶は絶句してしまふ。

さやかが自分を好いていてくれることは、もう十二分に伝わっている。

それでも、まだファーストキスをしたばかりだというのに、いきなり妊娠させてくれと

言われれば驚いて当然だ。

そんな晶の戸惑いを、その表情から読み取ったのだろう。

「だってそうなれば……絶対に私と……結婚してくれるでしょ？」

そう続けたさやかのカセリフで、やっと彼女の真意がわかった。

つまり、さやかの狙いはデキちゃった結婚だ。

そうなれば、他のお見合い相手と昨日のように争うことなく晶と確実に結婚できる。

(……会長が……そこまで俺のことを……)

今まで憧れと尊敬の対象だった生徒会長が、とてもいじらしく、そしてたまらなく可愛く見えてくる。

こうなると、晶も健康な男の子。

「ああん♥ あ、晶さん♥」

無意識にさやかを下からギュッと両手で抱きしめていた。

(うわっ、せ、背中細っ?! な、なのに……おっぱいがこんなにデカくてツツ!)

己の胸にむにゅんと押し当てられている柔らかな膨らみのボリューム感に、股間が急に窮屈になってくる。

こちらの腹に跨がって身体の前面を密着させているさやかも、すぐにその変化に気付いたようだ。

今までとは違う顔の赤らめ方をして、晶の顔を恥ずかしそうに見詰めてくる。

「……あ、あの……晶さんのが……その……」

「い、いやこれは……か、会長の胸が密着してるから……つ、つい」

別に「つい」なってしまう類いのものではないのだが、他にいい言い訳が思いつかなかつた。

とにかく女の子とこんな状況になることが初めてで、嬉しいのと、興奮しているのと、初体験の緊張感がゴチャ混ぜになって、もともと鈍い頭が余計に回らなくなっている。

「……わ、私の胸で……つい、ですか？」

彼女は恥ずかしそうに二人の間で押し潰れている己の胸に視線を向けると、慌てたように密着させていた上半身を起こしてしまった。

そしてこちらの腰に跨がったまま、豊かに盛り上がった自らの胸を指先でソツと触れる。  
「……晶さんって……大きなおっぱいが好きなんですか？」

「ツツツツ!! そ、それはその……い、一部特殊な嗜好の者を除いて……男子の大半は大きなおっぱいが好きなのわけです……はい……」

こんな時だというのに、何やら苦しい国会答弁のような口調になってしまふ。

しかし相手は気を悪くすることもなく、純粋に今のセリフを受け取ってくれたようだ。

「私、この身体に生まれてよかったです。自分の好きな人好みのおっぱいで」

「す、好きな人好みって……」

前々から思っていたが、さやかは少し天然だ。

言葉のチョイスが今ののように、本人が意図せずなかなか大胆な時がある。

「……あ、晶さん……私……」

しかも今は行動まで大胆で——啞然としている晶をよそに自ら制服のボタンを外し、さらに中のシャツのボタンまで外し出した。

シャープな陰影を作る鎖骨に、細い二の腕と薄く形のいい腹筋が目飛び込んでくる。

制服の下に隠れていたお嬢様の上半身はその清楚な美貌に似つかわしく、骨格から華奢で肉付きも薄く、とても繊細で儂げだった。

ブラジャーを豊かに盛り上げている『好きな人好み』の胸を除いては——。

(ほ、本当に……で、でかい……)

制服を着ている時からわかっていたことだが、実際にこうして下着姿を目の前になると、そのたっぷりとした盛り上がり方に圧倒されてしまう。

「えっ!? ち、ちよつと……うわぁ……」

彼女がブラジャーのホックまで外したため、固唾を飲んでそこを見上げていた晶は、思わず声を漏らしてしまった。

胸を覆っていた下着がはらりと下に落ちた瞬間、初めて目にする生バストに少年は両目



晶は自らの胸をドキンドキンと高鳴らせながら、両手をその胸へと向かわせていった。母性に溢れていて、控え目で、それでいて芯が強い。

このとてつもなく魅力的で美しい乳房は、まさにさやかそのものだった。

「ッツふあん!？」

指先がその生バストに触れた瞬間、さやかがヒクンと身体を震わせる。

「あっ!?! い、痛かった?」

何しろこちらは、この手の行為が全くの初めてなのだ。

女の子の身体が、どの程度で痛みを感じるのかわからない。

「だ、大丈夫です。あ、あんまりいきなりだったので……驚いてしまった」

「……ご、ごめん」

と謝りながらも、一度掴んだ彼女の乳房を手放せないでいた。

彼女もそんなこちらの気持ちに敏感に察知してくれたようで、

「わ、私の胸……晶さんの好きにしてください」

「うん!」

さやかの許しが出ると同時に晶は子供のように頷いて、鼻息荒く豊かな乳房を揉みしだき出す。

(凄いコレ! 何、このプルンプルンした独特の感触!)



生徒会の仕事と違い、エッチに関しては自分の方が上だと思っていたところにヌルンと来られて純粋に驚く。

「ツツツツ!!」

しかも彼女の舌がこちらの舌に触れた瞬間、眉間を深くえぐられるような鮮烈な快感が迸った。

（うわっ?! な、なに今の！ ベロチュウってこんなに気持ちいいの!）

気付いた時には晶からも、相手のしなやかな肉片に自らの舌を絡みつかせていた。

——レロくちゅ、クチュン！ むちゅ、レロくちゅン！

舌の感触が気持ちいいことはもちろんだが、味覚器官が一際高感度なために、これほどの快感を得ることができのさろう。

舌同士を強く擦れあわせると脳裏が白く瞬くほどの肉悦が迸り、接触面積を増やすようにねちっこく絡めあうと、後頭部がじんわりと痺れるような愉悦が広がる。

「んちゅん♥ あきらあ……レロんちゅんん♥」

姫乃も同じような快感を得ているようで、漏らす吐息がとても甘い。

（初めてのクセに、凄く舌の動きが積極的だし!）

何よりたまらないのが、相手の気持ち言葉が言葉を介せずダイレクトに伝わってくる。己の意志で自由に動かせる部分だけに、感情がそのまま動きとなって現れる。

姫乃が一生懸命こちらの舌に動きを合わせてくる様は『アナタのこと、大好きです』と一舐めごとに告白されているようなものだ。

「つぶつぶあ」

あまりの甘さでむせ返りそうになり、少年は濃密だったディープキスを中断して、ゆっくりと顔を上げた。

「はあはあ♥ あ、あきらあ♥」

こちらを見上げる金髪のお嬢様は、普段の凛々しさからは想像できないほどトロトロに蕩けた顔になっている。

(エ、エロお。そ、それにトロトロと言えば……)

初ディープキスに夢中で気付かなかったが、いつの間にかあれほど強烈だった蜜壺の締めつけが程よいものになっていた。

これならもう破瓜直後ほどの痛みはないだろう。

「そろそろ、セックスの続きを始めるよ？」

「うん♥ 晶の赤ちゃんが授かるように、いっぱい愛してね♥」

蕩けた顔のままコクリと頷くその表情は、先ほどのように強がっていたり、我慢をしている感じではない。

(こんなの見せられたら、もうこっちの我慢も限界だし！)

それでも獣のように腰を突きまくりたい気持ちでグッと抑えて、まずはゆつくりと腰を前後させていく。

「つくううう!!」「はあああん!」

互いの性器が擦れあう快感に、二人とも軽く顎が上がった。

快感神経の塊に久しぶりに与えられた鮮烈な刺激に、晶はグッと奥歯を噛みしめる。

視線を下に向けてみても、姫乃の美貌には痛みによる歪みは見取れない。

少年は奥歯を強く噛みしめたまま、腰をゆつくりと突き続けることにする。

「つくう……す、凄いやお……あ、あつくて……硬くて……つくううう」

こちらの動きに合わせて、姫乃がくぐもった声を上げる。

喘ぎ声を聞かれるのを恥ずかしいと思っているのだろうか。

握りしめた片手で口元を覆い、その声を漏らさないようにしている。

彼女の瞳にも愉悅の潤みと共に、濃い恥じらいの色が見取れた。

(は、恥ずかしいといえば……瑠璃宮の今の格好つけてっこう凄いやな……)

上も下も制服を着たままで、靴下だって履いている。

なのに女の子として一番大切なところを覆うショーツだけ脱いで、そこを自分に一番奥

まで貫かれていた。

晶にとって制服姿の姫乃イコール鬼の副会長なので、別に制服フェチだというわけでは

ないが、なんだか異様に興奮してしまふ。

(でも、やっぱりここだけは……ちよつと物足りないかも……)

晶の視線が向いたのは彼女の胸元だ。

もちろんブラもそのまま着けているはずで、制服を豊かに盛り上げている二つの乳房が、自分の突入に合わせてあまり揺れない。

初体験の時、さやかなの巨乳がポインポインと弾むところを見続けていただけに、目が贅沢になっている。

晶は思わず片手を伸ばし、制服のボタンを外し始めていた。

「ああん!」

うっとりとお瞳を閉じて抱かれていたお嬢様が、こちらを恥ずかしそうに見上げてくる。

「い、今さらだけど……ブラだけでいいから……は、外してくれない?」

ホックが後ろにあるため、晶だけでは外すに外せない。

姫乃は一瞬だけ驚いた表情を見せたが、すぐにコクンと頷いてくれた。

普段はあれほど口喧しいのに、やはりベッドの上ではとことん従順なお嬢様である。

自ら身体を軽く浮かせて片手を後ろに回し、器用にホックを外してくれた。

(おおう!? なんか今のもゾクツときた!)

自分の指示に従って姫乃が動く。

生徒会の時は全く逆の状況に、男としてたまらない昂りを感じてしまひ――。

「あはあああん！ やん！ い、いきなり、そんな――はああああん！」

無意識に激しく腰を突き込んでいた。

ブラを外すため口を押さえていかなかったお嬢様が、そのためとうとう、鼻にかかった可愛らしい喘ぎ声を上げてしまう。

「も、もう！ ふ、不意打ちみたいなことしないでよ！」

それがよほど、恥ずかしかつたようだ。

姫乃が顔を急に真っ赤にして、この時ばかりは生徒会の時のようにキツく睨んできた。

頭では条件反射的に『ヤベッ!!』とビビりつつも、身体の方は牡のスイッチがもう入ってしまった。

「あはああああん♥」

ズン、と再び強く女体の最深部を肉棒で突くと、鋭かった彼女の視線が一瞬でトロンと蕩けてしまう。

「だ、だめっ♥ ああん♥ そ、そんな風に――ああっ、らめっ、らめえええ！」

止まらない晶の突入に、姫乃は口を押さえることができずに可愛らしく身をよじる。

（エロすぎるだろ、こんなの！）

普段の厳しい副会長の姿から、一瞬でベッドの上の姫乃に戻った。

これほど対照的な姿をを見せつけられて、そのギャップの凄まじさを改めて実感する。  
(だってあの瑠璃宮が、俺に抱かれて、らめえ、とか言ってるんだよ！)

恥ずかしそうに抗議してくる口を、たまらず上からキスで塞ぐ。

今度はこちらから舌をヌルンと躍り込ませると、晶に対して抗議の言葉を紡ぐはずだったその舌を、媚びるように絡ませてくる。

「んんん♥ こ、こんらのズルいよお——んちゅん♥」

可愛い。

今の姫乃は、反則的に可愛すぎる。

さらに興奮の度合いを高めた少年はがむしゃらに舌を絡めあいながら、右手はお嬢様の胸に向かわせた。

ホックを外したままになっているブラを取り去り、自由になった牝肉を直に揉む。

(うっわ！ このおっぱい凄い感触！)

中に詰まった乳肉の密度が濃いだけでなく、乳肌自体の張りも素晴らしい。

そして柔らかいのももちろんだが、それに負けない弾力も併せて持っている。

晶は夢中でそれを揉みしだき、指先で探り当てた頂点の突起も擦り上げた。

「んっ?! っんん?! んっ、ツッんん！」

絡めている舌がビクンビクンと敏感に強張り、男根を根本まで受け入れている膣壁たち

が甘えるように竿肌を強く吸ってくる。

「そのたびに、これほど興奮しきった状態ですら、思わず手の動きが止まってしまおうほどの強烈な愉悦が迸る。」

口で、両手で、そしてセックスで——全身で姫乃の女体を味わい尽くす。

「っ……っくあ♥ あっ……っふあ〜♥ も、もうらめええ〜♥」

全身の性感帯を貪るように責められ続けていた姫乃が、もう我慢できないという感じでのその美貌を仰げ反らせた。

「執拗に絡め続けていた舌がヌルンと外れ、晶も一旦腰の動きを止めて、改めて彼女を見下ろす。」

（スゲーえ！ 俺が瑠璃宮をこんな風にしたんだよな！）

普段、あれほど鋭利な美貌が今は官能に茹であがり、鮮やかなピンク色に染まっている。眉も八の字に垂れ下がりがり、瞳も泣いた直後のように潤みきっていた。

いつも凜々しく引き結ばれている唇は、はあはあ、と甘い吐息をつきながら「あ、あきらあ♥ 気持ちよすぎて頭がおかしくなっちゃうよお♥」と呟いている。

自分とのセックスが、気丈な副会長の心身をここまでトロトロにしたのだ。

その実感は、男として心の底から震えがくるほどの喜びだった。

「もっと！ もっともっと気持ちよくしてやるよ！」

興奮の極致に達した少年は、激しい突入を再開させる。

「はああああん！」

直後、姫乃が己を貫く壮絶な快感の稲妻に打たれたのか——制服を着たまま全身を大きく弓反らせた。

構わず晶は動き続ける。

こちらの突入に合わせて美しい両脚が淫らに宙を漕ぎ、靴下の中で五本の指がバラバラに折れ曲がる。

「らめなのお！ これいじょうはもうらめなのおおお！」

呂律の回らない哀願をされればされるほど、少年の動きは獣染みたものになっていく。

——ぐちゅん！ ぐちゅズチュっずんぐちゅくちゅん！

肉矛を激しく奥へと突き入れるたびに、しなやかな膣壁たちがそれを受け止め、獣欲をさらに煽る極上の快感を弾けさせる。

（おっぱいも凄いことになってるし！）

大きく開かれた制服の中で、二つの丸い膨らみがタブンタブンとダイナミックに弾んでいた。

自分の動きに合わせて揺れる豊かな乳房は、牡の興奮を本能レベルで刺激する。

性器の交わりによる快感に、この視覚的な興奮まで上乘せされて、少年は瞬く間に追いつ

詰められていく。

「あああ！ もうイク！」

晶がたまらずそう叫び、慌ててペニスを引き抜こうとした。

しかしその瞬間、それまでセックスの動きに合わせて淫らに宙を躍っていたあの美しい両脚が——がしん！

と、いきなり腰に巻きついてきた。

「お、おいしい！」

思わず悲鳴に似た声を上げてしまう。

「このままイッて！ 晶の赤ちゃん、孕ませてって言ったでしょおお！」

「だ、だからそれはヤバいだろって！」

そう叫ぶこちらの首筋に、彼女が両手を巻きつけて、顔を至近距離に引きつけてきた。

そしてすがるような、媚びるような甘い声で、こうおねだりしてくる。

「お願い！ 晶の赤ちゃんが欲しいのお！」

「ツツツツツ!!」

「晶の全部、私の中にぶちまけて！ いつ排卵日でもすぐに受精しちゃうぐらい、私の中を晶の精液でいっぱいにしてえええええ！」

姫乃ほどの美少女に、こんな風に哀願されて、それでも断れる男が果たしてこの世にい



るのだろうか。

ただでさえ獣欲に沸騰していた肉体が、目の前が一瞬白むほどの、極限の興奮に取りつかれる。

「あああああああああああ！」

すでに限界ギリギリまで昂つていたこともあり、腰が勝手にラストスパートに入ってしまう。

痙攣にも似たその細かな動きは、腰に両脚が巻きつかれていてもほとんど影響がない。

極限まで剛直している男根が蜜液まみれの膣壁たちと激しく交わり、トドメの肉悦を限界ギリギリの少年にもたらず。

「も、もうイク！ イッちゃううううう！ あああああイクううううう！」

晶はそう絶叫すると同時に、動きを止めた。

「限界まで我慢していたザーメンが、凄まじいスピードでペニスの中を駆け抜けていく。

——どぎゅん！ どりゅドギュッ！ どきゅドグン！」

その直後、姫乃は後頭部をベッドに叩きつけるようにして弓反った。

「んはああああああああ！ でてるううう！ 私の中であきららの熱いのいっぱいドクドクしてらうううう！」

そして、こちらの腰に巻きついていたあの長くて美しい両足がビクンと広がり、

——ブシアアアアアアアアアアアッ！

彼女も盛大に絶頂液を吹き出した。

下腹に熱い牝潮を浴びながら、晶は深く腰を埋めた姿勢のまま牡の脈動をし続ける。

(ダメなのがいいいい！ ホントは外に出さなきゃいけないのいいいい！)

完全に中出しだ。

すでに腰は自由になっているのに、姫乃の最深部に己の男根を捻じ込んだまま、射精をすることを止められない。

「あああゝ！ ああああああゝ！」

しかも、その罪悪感と膣内射精の快感を削ぐどころか、さらに勢いを促進させた。

全身の細胞が快感で沸騰でもしているような、凄まじい肉悦に包まれている。

晶はそのまま己の全てを姫乃の中に吐き出し終えると、全身の力が抜けて彼女の上にもドサリと上半身を落とした。

(……き、気持ちよかったああゝ♡)

はあはあ、と荒い呼吸をしながらうつとりと瞼を開ける。

目の前では己の精液を全て受け止めてくれたお嬢様が、自分と同じようにはあはあと荒い息をついていた。

「る、るりみやあ♡」

「ああん♥」

晶はイッた直後で敏感になつてただけに、まるで女の子のような声を上げてしまった。

「えっ!? なになに今の!? オチンチンに直接、そんなことしてもいいの!」

「フェラつてやつよ! ちよつとさやか! 一人占めはズルいわよ!」

左右の二人もすぐに男根に群がってきた。

晶の股間の前に左から、姫乃、さやか、凜の順でお嬢様たちの美貌が並ぶ。

「わわっ!? ちよつ、そんな三人がかりでいきなり——つくふああん♥」

金髪、黒髪、赤毛と三色の美しい髪がサラサラと揺れながら、項垂うなだれている肉棒にキスの雨をチュツチュツと降らしてくる。

一人でさえ、潤いを帯びた唇の感触が気持ちいいのに、それが三倍の量で男根全面を覆い尽くし、あまりの愉悦に晶は上半身を身悶えさせた。

「さっちゃんはいっぱいしてもらったんだら、もういいでしょ!」

「たっぷりと種付けしてくれたオチンチンに対する、これは私の感謝の気持ちです♥」

「二人とも邪魔よ! もうちよつとそちいつてよ!」

「あくん♥ 晶さあん♥ ぺろっ♥」

「うわっ!? ア、アッキーの先つちよが、ヒクンつてなった……」

「私、実はキャンデーで練習してたんだから! ま、負けないんだからね!」

唇だけだった口奉仕に、今度は舌まで加わった。

ふにやり、としていた肉棒が、三枚の桃色舌に絡みつかれてヌルヌルとくねり出す。

「そ、そんな、さ、三人がかりでそこまで……つくふぁ！ つふぁあぁあ！」

キスだけでも充分に気持ちよかったのに、それに舌まで加わって、少年は頭を抱えて激しく喘ぐはめになる。

晶にとつて、何しろこれがフェラチオの初体験だ。

その壮絶な快感に、イッたばかりの男根が再び力を取り戻し始める。

結果、三方向から伸ばされる舌の動きを剛直によって受け止められるようになり、さらに快感量が増してしまう。

——チュパッ、れろくちゅん。レロレロ、むちゅううつ。クチュれろおおん。

そそり立つ男根の先端から根本まで、三人が争うように舌を這わせてくる。

ぬめりのある唾液としなやかな舌の組みあわせには、快感をより深くまで男性器に浸透させる効果があるようだ。

ペニスの芯まで染み込んでくるようなその肉悦に、喘ぎ声が止まらない。

(そ、それに……皆の顔がエッチすぎてえ……)

己の股間に並ぶ三人の舐め顔に、晶は眩しいものでも見るように瞳を細めていた。

「わー♥ 勃起したオチンチンって、こんなに熱くて硬いんだあ——ペロぬちゅうう♥」

「フェラしながら見ると……また随分と印象が違うわね——くちゅ、レロんちゅん♥」

「凄いですよ♥ 立派ですよ♥ 晶さんはサイコーですよ——レロぬるレロくちゅん♥」

美少女お嬢様たちが桃色舌をいっぱいに出して、青筋立つ己のペニスを舐めまわしている光景は、それだけでイッてしまいうに充分なインパクトだった。

「も、もうダメだって……三人がかりでそんなにねちっこくしゃぶられたら……お、俺……もう、もたないよお」

こちらの身悶える反応が楽しくて、積極的に舌を躍らせていた三人がハツとなる。

今は晶を気持ちよくさせて、喜んでいる場合ではない。

何がなんでも、赤ちゃんを孕まなければいけない時なのだ。

「それじゃあ次は私とするわよ」

「何言ってるの！ そんなのボクに決まってるじゃん！」

左右の二人が口奉仕のために屈めていた上半身を勢いよく起こし、次の種付け権を争い睨みあう。

「お二人とも忙しそうなので、それでは私がダメ押しのもう一回を♥」

その間に黒髪のお嬢様が、ちゃっかりとこちらの股間を跨ごうとする。

「絶対、ダメー！」

「そのポヤポヤしている雰囲気で騙されそうになるけど、何気にさやかが一番、抜け駆け



が酷いんだからね！」

「あらあゝ？」

結局、姫乃と凜がじゃんけんをして——次は姫乃ということになった。

「……な、なんでボクは、いつもいつも最後なんだ……」

自らのチョキをショボンとした顔で見詰めている凜とは対照的に、姫乃が「よしッ！」とグーの手のまま豪快にガッツポーズを決めている。

「姫乃さんは普段はとても理性的でクールなのに、晶さん絡みになると何気に一番熱いよ  
うな気がします」

さやかのお返ししのツツコミに、姫乃が耳の先まで赤くなる。

「と、とにかく！ 次は私の番なんだから！ さつさと始めるわよ！」

そんな自らの恥ずかしさを振り払うように、金髪のお嬢様がこちらの腰を跨いできた。

「え、えっと……その……ソレは？」

姫乃はまだ青いフリルで縁取られた下着の上下を着けたままである。

「……アンタは、その……コレは着けてたままがいいんでしょ？」

「い、いや……そういうわけでもないんだけど」

「……なら、脱ぐ？」

「あつ。ちよつと、待った」

彼女が自らのショーツに手をかけた瞬間、反射的にストップをかけてしまった。

別に下着フェチだというわけじゃないが――。

「……そ、そのままでもいいなら……そのままで」

姫乃はほんのりと頬を赤らめたままコクンと頷くと、指を引っかけるようにしてクロッチ部分を横にズラした。

淡いブルーの下着を剥くようにして、金色の茂みとその下の桃色の牝華が視界に映る。

「そ、それじゃあ……い、入れるわよ」

「う、うん」

こちらの腰を跨いでいる姫乃が、ゆっくりと腰を下ろしてきた。

彼女が自ら指を添えてぱっくりと開いた牝裂の粘膜部分に、肉先がくちゅりと密着した瞬間、背筋にゾクンと愉悅の震えが走る。

「わー」「……むー」

羨ましそうな顔をしたさやかと、悔しそうな顔をした凜に見詰められながら、姫乃と一つになっっていく。

（あああああ。これってやっぱり何回してもすっごく、気持ちいい）

蜜液滴る牝褰を、勃起ペニスで掻き分けていく挿入感、何度味わってもたまらない。

姫乃もそのノーブルな美貌をプルプルと小刻みに震わせて、やっと独占できる男女の結

合感をじっくりと味わっているようだ。

「い、今しているのは……困ってるアンタのお家を助けるために……仕方なくなんだからね。別に私がエッチなわけじゃないんだから……か、勘違いするんじゃないわよ」

金髪のお嬢様はわざわざそう断ってから、ゆっくりと腰を動かし始めた。

「つくう〜」

愛液たっぷり奥までヌルヌルでトロトロな膣壁たちの感触が、あまりに心地よかつたために、喉の奥から絞り出すような声が漏れてしまう。

否応なくもたらされるセックスの快感に、少年は素直に身を委ねた。

ただ、初めての騎乗位で姫乃の腰使いはタドタドしく、見ている分には少し心配になるレベル。

しかしこれだけたっぷり潤っていて膣壁もしなやかなら、上の彼女が多少ヘンな動きをしても、互いの性器を痛める心配はなさそうだ。

（うわわっ!! 下からだ、やっぱり凄い眺めだな!）

彼女の動きが少しずつなめらかになっていくのに比例して、ゴージャスな金髪がふわふわと揺れ、腹筋が騎乗位だからこそのくねりを見せる。

そして青いフリルに縁取られた、胸の豊かな盛り上がり、タプンと扇情的に弾んでいた。

彼女ほどのサイズになると、たとえブラをしていてもその動きを抑えられないようだ。ただ完全にフリーな状態のダイナミックな揺れ方ではなく、その範囲は控え目で、カップから溢れた上乳が細波を打つように揺れていた。

下着を着けているからこそその、その扇情的な柔肉の動きに、少年の目も自然と引き寄せられてしまう。

「もう！ アッキーってば、そんなにうっとりした顔をしちゃってえ！」  
凜がヤキモチ顔をして、そんなこちらの顔を睨んでくる。

「し、しょうがないだろお〜」

「じっくりエッチしすぎて、姫ちゃんの中に全部、出しちゃわないでよ！」

「そんなこと言われても……お、俺にはどうすることもできないわけだ」

少年が言い訳がましくそこまで言うのと、幼馴染みが何かに気付いた顔になる。

「そうだ！ こうなったらアッキーをスグにイカせちゃえばいいんだ！」

一体どういう解釈で、その結論に達したのか。

あまり男のことがわかっていない様子の幼馴染みが、晶の身体をいきなり舐め出した。

首筋から肩、二の腕などを、先ほどペニスを舐めていた時と同じ要領で、元気いっぱいペロペロしてくる。

ただ晶が姫乃の動きに合わせて身体をビクンと震えさせたりすると——ムッ、とヤキモ



「私とエッチしてるんだから、今は私に集中しなさいよ！」

そんな中、騎乗位で繋がっている姫乃が、抗議の意味でか腰を大きくカクカクと振ってきた。

肉棒の先端から根本までを、潤いに満ちた蜜褌たちに激しく擦られて、目の前が一瞬、白むほどの快感が迸る。

「わわわっ!? る、瑠璃宮ツツ！ そんないきなり！」

最初はタドタドしかなかった腰使いが、かなり熟れたものになっていった。

未知の愉悦に責められている最中、ただでさえ極上の蜜壺と激しく交わり、気を抜いたらそれだけで暴発してしまいそうになる。

(……あ。別にいいのか、今は……)

彼女たちに膣内射精をするのが、何よりも優先されている状況だった。

しかし男の性で、少しでもこの極上の快感を長く味わっていたいと思ってしまう。と。

「はあん!? わ、私の中で……アンタのがピクンていきなり金属の塊みたいに硬くなって、お、オヘソの裏側にゴリンっつてしてえ」

相手の反応によって、こちらが漲り、それによってまた相手を感じる。

そんな肉悦の好循環が、二人の間で行われ始める。

「あ、あきらあ〜」

よほど、今のセックスで深く感じてしまったのだろう。

金髪のお嬢様と視線が合うと、あのやり手副会長とは思えない、粘っこい甘えた声を出して、彼女自らこちらの口に唇を重ねてきた。

先日の正常位の時とは立場が完全に逆で、上になった姫乃が積極的に動きながら、舌まで深く差し入れてくる。

「んちゅん……瑠璃宮っ。るりみやあぁ〜」

晶も相手に合わせて、彼女の名前を呼びながら、積極的に舌を絡めあう。

「……も、もう……」

不意に彼女が顔を上げた。

濃厚なセックスとディーブキスによりトロンと蕩けた瞳で、なぜか切なそうにこちらを見詰めてくる。

「……わ、私だけ……そ、その……ゴニヨゴニヨ」

「え、えつと……その……よく聞き取れないんだけど……」

「だ、だからあ。わ、私だけ……なんで名前で呼んでくれないの？」

「へっ？ ……あー」

こんな時だというのに、気の抜けた声が漏れた。

別に差別をしていたわけではなく、自分の中では『瑠璃宮』と苗字で呼ぶのが一番自然

だったので、ずっとそう呼んでいただけだ。

「こ、ごめん……その……ひ、姫乃」

しかしいざ改めて名前で呼んでみると、やっぱり照れる。

セックスの真つ最中ながら、こんなことで顔が熱くなってしまう。

「ッッッッッッ!!」

しかし相手の反応は、こちらの比ではなかった。

耳の先まで一瞬で赤くなると、中のペニスを強烈にキュッーと締めつけてくる。

「おわっ!?!」

股間から轟いてきた壮絶な愉悦の稲妻が背筋を貫き、一気に脳天まで突き抜けて、思わ

ず大きな声が出てしまう。

「ああん♥ あきらあ〜♥」

その唇を、ますます蕩け顔になったお嬢様に再び塞がれる。

「んちゅんん……姫乃お……ひめのお」

「も、もつとお名前ですよんれえ……レロんちゅん♥」

晶はうつとりと瞼を閉じて、自らの舌に意識を集中させた。

——レロくちゅ、れろおん♥ くちゅ、レロれろおおん♥

互いの唾液を水飴のようにこねあわせながら、濃厚なディープキスを交わす。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載は厳禁です。無断で複製・転載は法律の範囲内で厳禁です。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!